

子どもは親の作品？

16歳の娘が拒食症になり、その母親のカウンセリングを引き受けていた時の話です。最後のカウンセリングで子育てを振り返り、母親は「私は自分の作品を作っているような気持ちで、子どもを育てて来たのかもしれませんが」と、力無く話されました。

子どもの頃からいわゆる「いい子」で、手がかからなかった自慢の娘が念願の志望高校に入学し、ホッと一息ついた初夏の頃、母親は娘の異常な痩せに初めて気がついたそうです。食べ盛りの筈なのに、食事を摂る量がほんの少しで、自分が決めた分量だけしか食べません。娘の痩せは周りにも気づかれるようになり、しばらくして月経も止まりました。心配のあまり、嫌がる娘を連れてあちこちの医療機関を訪れたそうです。ある医療機関で、親の育て方がおかしいのではないかと問われ、母親は随分傷ついたそうです。

当初のカウンセリングでは娘の病気の心配、次々に現れる症状や家庭での不思議なこだわりの様子が語られました。例えば、夜が明ける前に長女が家中のカーテンを開ける。雨が降っていても、毎日玄関に水を蒔いて掃除をするなどです。何をしても娘の許可が必要になり、母親だけではなく他の家族も困るようになりました。毎日がこんな風ですから、みるみる家族は限界に達し、とうとう娘は家の近くのアパートで一人暮らしを始めることになりました。母親は高校生の娘の一人暮らしを心配しながらも、少しずつ娘との距離をとることで、娘に振り回されず、いろいろな選択や決断も娘に任せることができるようになってきたのです。

「作品を作るように子どもを育てている」のはこの母親だけではないでしょう。最初は、親は多少なりとも、子どもに夢を託し、ある程度の期待をかけながら育てるのが当たり前です。自分の作品を作るようにね。しかし、絶対やってはいけない事は、子どもをコントロールし、親が子どもの全てを支配してしまうことではないでしょうか。親の敷いたレールに乗せ、「あなたのためなの！」と子どもに言い、親の価値観を押しついたり、有無を言わず命令したりするのは間違っています。それは「子どもを虐待している」ことと同じなのです。どんなに幼い子どもであっても、人は皆「我（自分）」を持っています。「私の子ども」であっても、親とは違う「一人の人間」として子どもを尊重しなければ、子どもは自分自身を生きることができません。子どもは親の思うようには育たないものなのです。

さて、あなたの「作品」の出来はいかがでしょうか？



The Miracle of APJapan

APジャパンの奇跡 (後編)

June 8, 2021 June Seat

APJapan was getting organized. We had set up a Fukuoka office in the fall of 1990, and also had one in Tokyo. We had set up Area Directors to encourage and lead groups: Ms. Aruga was our Tokyo director and Ms. Kazumi Shibutani in Fukuoka. Ann Tamaki was a tireless leader, and often translated for me as we traveled about Japan. Carolyn Barkley was a Certified Public Accountant who kept track of AP finances. Many, many people were involved. We had some exciting times: two Trainer of Trainers events, one in Fukuoka and one in Tokyo, and even a visit from Dr. Popkin and his family. One miracle after another!

Then came 1997, and reality hit. The sales of the materials were not enough to pay office staff and Dr. Popkin's royalty fees. I wrote letters to the leaders that fall and told them we were broke. We had closed the Tokyo office. The letter also stated: "The good news is that 2000 people have studied the material and used almost all the first printing of Texts and WBs. The bad news is we have no money to re-print the materials." The Area Directors met to discuss our dilemma with the Leaders. No miracle in sight.

But, a young leader named Toshiko Nonaka was present at the meeting in Fukuoka. She decided she could take on the responsibility for APJapan. I wrote the leaders throughout Japan and described Nonaka San's qualifications "knows the program well; practices AP principles in her relationships with others; has been a leader for several years..." I told them I thought Nonaka San being Dr. Popkin's Representative in Japan was a very good idea, but added "In the spirit of AP everyone has the right to offer their personal opinion about the matter and you are invited to do that..." Indeed, just when I feared APJapan might die, Nonaka San appeared as another miracle. I once told Nonaka San I thought she was a gift from God.

APジャパンは組織化され、1990年の秋には福岡と東京に事務所を構えました。それに伴いエリアディレクターを作り、各地のグループを励ましリードしてもらいました。有賀さんは東京を担当し、渋谷さんが福岡を担当しました。玉城アンさんは疲れ知らずのリーダーで、私たちが日本各地を旅行するときにはよく通訳をして下さいました。キャロライン・バークレーは公認会計士として、APの財務を担当しました。本当にたくさんの方が関わり、応援してくれました。福岡と東京で開かれたトレーナートレーニングに、ポプキン博士がご家族とともに訪問してくださったときは興奮しました。奇跡の連続でした。

1997年になって、大きな問題に直面しました。テキストの売り上げだけではスタッフの給与やポプキン博士へのロイヤリティを支払うことができませんでした。その年の秋、私はリーダーたちに手紙を書き、経済的に行き詰まったことを伝え、東京の事務所を閉じました。その時に書いた一文です。「良い報告は2000人もの方がAPを学び、初版のテキストやワークブックの在庫がないということです。悪い報告は、再版するための資金がないということです。」エリアディレクターが各地のリーダーたちと会い、このジレンマについて話し合いました。しかし奇跡は起きませんでした。

しかし、福岡での会議に若いリーダーの野中利子さんが参加していました。そこで、彼女はAPジャパンの責任者となることを決断してくれたのです。私は全国にいるリーダーたちに手紙を書き、「野中さんはプログラムに精通しておられ、周囲の人間関係においてAPの原則を実践している人です。数年前からリーダーとして活躍しています。…」彼女こそポプキン博士のプログラムの日本における責任者として相応しいと思いますと伝えました。そしてこう付け加えました。「APの精神に則って、この件に関して全ての方が自由に意見を持つ権利があり、また歓迎されています。」実際、APジャパンがなくなってしまうかもしれないと恐れていた時、奇跡的に野中さんが現れたのです。私は野中さんに「あなたは神様からの贈り物です」と伝えたことがありました。

After that I had six more years in Japan before we retired and enjoyed working with Nonaka San. We made several trips about Japan holding workshops. Once we even visited the AP Leader Fumiyo Miyuchi and her Family in Hokkaido. We stopped by the famous ice Festival in Sapporo on our way home.

Since I left Japan, Nonaka San has continued the work for 17 more years. As APJapan grew, she became busier, almost to the point of exhaustion. I was happy to receive a message from her recently that she has found a Deputy Representative, Ms. Aiko Hatanaka. And so, the miracles continue for APJapan.

I still believe in miracles, and each one of you is part of the Miracle that is APJapan. I believe good things will happen as you plan the future together as an AP Family where all are respected and equal. Thank you.

その後、宣教師として引退するまでの6年余り、野中さんと一緒に活動できたのは喜びでした。私たちは日本国内を何度か旅行し、APのワークショップをしました。あるときは北海道まで足を伸ばし、APリーダーの宮内ふみよさんとその家族を訪問したこともあります。帰路に有名な札幌の雪まつりを見学したことは、良い思い出です。

私が日本を離れて以来、野中さんは17年もの間APの活動を続けてきました。APジャパンが成長するにつれ、野中さんは本当に多忙を極めていました。最近になって野中さんから一通の嬉しい知らせを受け取りました。それは、畠中愛子さんがAPジャパンの副代表となられたということでした。こうして、APジャパンの奇跡が続いているのです。

私は今もなお奇跡を信じています。そして、皆さまお一人お一人がAPジャパンの奇跡です。お互いに尊敬と平等をもって、APファミリーとして共に未来を思い描く時に、次の奇跡が起こっていくと信じています。ありがとうございました。

---June Seat, June 8, 2021

ジューン・シート 2021年6月8日
(翻訳：岩上 頼子)

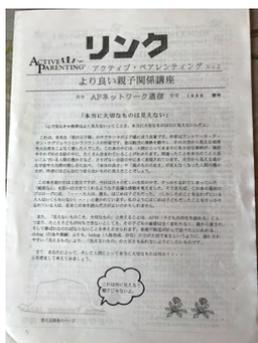
※ハローフレンズはお休みし、リンク夏号に引き続き2021年6月9日（日本時間）に行われた全国リーダー研修会でのジューン・シートさんのスピーチ（後編）を掲載しました。

APジャパンの代表になって、今年で23年目になりました。なつかしいですね。モノクロです！リンクNO1とNO2



1998年

ポプキン博士との契約書にサイン



ジューンさんと共に！



1998年
ポプキン博士に会いに行く。
アトランタにて



What a wonderful world

地球の息吹を感じた夏

我が家の忘れられない冒険の記録 第3回



この連載も3回目。『きっと楽しみに読んでくださる方がいらっしゃるんだ〜』と勝手に勇気づけられている福岡在住リーダーのはたなかです。家族で過ごした大切な時間をこうして記録できることに、いつも感謝の気持ちでいっぱいです。

光の洞窟アンテロープキャニオンを出て砂漠を進むと、見えてきたのはアメリカの原風景とも言われるモニュメントバレー。『イーザーライダー』や『フォレスト・ガンブ』など数々の映画の撮影地となっている場所です。そびえ立つ岩山が近づくにつれ、そのスケールの大きさに圧倒。高さ300mにも及ぶ赤色の造形物は5000万年の月日をかけて風や雨によって作られたもので、今でも侵食活動は進んでいるそうです。

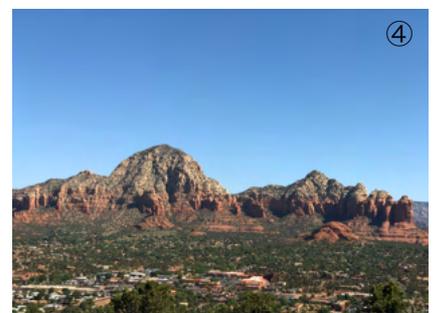
モニュメントバレーを一望できる施設にしばらく滞在し、お昼ご飯はキャンピングカーで自炊です。カラカラの砂漠で冷えた素麺をズルズル。海外の食べ物も嫌いではないけれど、やっぱり慣れ親しんだ日本の味はほっとするものです。お腹を満たし一息ついたら、次は日本でもパワースポットとして有名なセドナへ出発。

砂漠の荒野を抜けると景色は一転、緑の生い茂る一帯に入りました。道に迫り出す木々の間をすり抜けるように車を走らせ、セドナの街に到着。まずは大地のエネルギーが特に強いと言われるボルテックス・サイトの一つ、エアポートメサへ向かいます。車を降りて少し汗ばむくらい山道を登ると、そこは街を360°見渡すことができる絶景スポット。しばし赤岩に腰を下ろしおもむろに深呼吸。う〜ん。確かにエネルギーを感じるような気がしてくるから不思議です。

セドナは光害対策に力を入れている街です。日本では聞き慣れない光害とはその名の通り過剰なまたは不要な光による公害のこと。そのため夜10時以降に街灯をつけたり部屋の灯りを漏らすことは禁止されています。早めに用を済ませ、キャンピングカーの明かりもオフ。するとどうでしょう。日本では体験したことのない暗さ。そして見上げるとこれまた日本では見たことのない満点の星空！首が痛くなるのも忘れ、吸い込まれるような星空をずっとずっと眺めていました。

私が海外旅行に子どもを連れて行く理由。それは日本を外から観る体験をして欲しいからです。日本では当たり前のことが海外では当たり前ではないこともある。自分の便利さを優先した行動が、誰かの不便につながっているかもしれない。海外に出てありのままの世界を観る体験から、日本人としてだけでなく、地球人として、同じ世界に生きるひとりの人間としての感覚を培い、責任を感じて欲しい。さらに壮大な自然に身を置くことで、畏敬の念を抱き、自分がどれほど恵まれているか、自分の悩みはどれほど小さいものか感じて欲しい。旅は、人として大切なたくさんのことを教えてくれる、これ以上ない教科書だと思っています。

冒険も終盤にさしかかり、
家族の協力精神もレベルアップ。
次回はいよいよ最終回？！
最後までお見逃しなく♡



写真①赤い広野にそびえ立つモニュメントバレー。大地の力強さを感じます。②長期の旅行には日本食を持参。砂漠で食べるそうめんにも子ども達も舌鼓。③④駐車場にキャンピングカーを止めここから10分ほどトレイルするとセドナの街が一望できるポイント『エアポートメサ』に到達。⑤我が家のビッグシェフ。キャンピングカーでの調理もお手の物です。⑥グランドキャニオンに到着。ここではゆっくり2泊して大自然を味わう計画です。

ワークショップ 開催しました！

アミカスワークショップ開催まで

アミカスワークショップは2019年に初開催し、昨年はコロナでやむ無く開催を断念、今年で2回目の開催でした。

福岡市の後援をもらい、当初6月7日の開催予定で準備を進めていまして、緊急事態宣言により9月22日に延期となりました。いつまた宣言が発令されるかと不安を抱えながら準備を進めていきましたが、案の定、開催10日前にして宣言の延期が決定し、会場となるアミカス（福岡市男女共同参画センター）は9月いっぱいクローズとなってしまいました。日程変更により、お申し込みをいただいていた方数名からキャンセルの連絡を受けたこともあり、これ以上の変更はできないとの思いから対面開催は諦め、延期せずオンラインで開催することに決めました。しかし、初めてのオンライン開催の準備を10日間で行うのは想像以上に容易ではありませんでした。

告知のためにチラシを800枚程度印刷し、福岡市の方で市内のこどもプラザに依頼して下さったり、学ぶ会のメンバーが手配りをしたり、メンバーの職場にチラシを置いてもらうなどして、20名募集のところ最終的に12名にお申し込みいただき、当日は10名の参加でした。また、ワークショップからAP講座を受講希望された方は5名で、10月から講座が始まっています。

今年はコロナに翻弄されましたが、常に告知、集客は課題です。メンバー個人の仕事やAP活動もある中、どのようにしてワークショップを開催し講座に繋げていくか、また若いリーダーさんのための練習の場としてどう活かしていくか、来年度に向けて考えていきたいと思えます。

(リーダー 朝長 真由美)

アミカスWSを終えて

アミカスでAP講座を開講するにあたって、ひとりでも多くの方に、APの魅力をお伝えしたいとの思いで、登壇させていただきました。

とはいえ、限りある時間の中で、何をもち帰っていただこう…、何を伝えできたら参加してよかった～と思っていただけかな…と頭を悩ませながらの準備期間でした。

リンク夏号でご紹介したAPを学ぶ仲間の会。そのAPを学ぶ仲間の会によるワークショップが9月と11月に開催されました。

今号では、学ぶ会の朝長リーダーと八十田リーダーにワークショップ開催までの経緯を伺い、実際に登壇されたリーダーさんにも感想をお聞きしました。

当初は対面での開催予定でしたので、たくさんのグループワークを通して、温かい気持ちや楽しい雰囲気味わってもらえるようにと思っていましたが、コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の発令と共にアミカス会場が閉館となってしまいました。

やむを得ず延期となったのですが、結局は再び感染の波が押し寄せ、同じ状況になってしまったため、「APを学ぶ仲間の会」としては初めてのオンライン開催にチャレンジすることになりました。

対面を前提に考えていたワークだったので、オンラインでどのような形式にしたらよいか、オンラインでどこまで良さを体感してもらえるだろうか、そもそも不慣れなZOOMのオペレーションをスムーズにできるのだろうか…

たくさんの不安を抱えながら臨むこととなりました。

APで学ぶ内容は、どれも大切かつ全体的につながっているの、どこを切り取ってお伝えするか悩ましかったものの、テーマ「子どもの自立のためにできること」に沿って、具体的にどんな関わり方をしていくとよいかという方法論もですが、心身共に自立していくための前提として、セルフエスティームを育てることの重要性を中心にお伝えしました。

zoomでの画面越し。何となく固い雰囲気からスタートしたワークショップでしたが、ブレイクアウトルームでのグループワークを終えるごとに、参加者の皆さんの表情が和らいでいくのを感じました。各グループに入ってサポートして下さったリーダーの方々のおかげで、温かい気持ちや楽しい♡を味わっていたワーク時間になったのではないかなと思えました。

最後は駆け足になってしまいましたが、アンケート結果では、多くのご参加者にAPへの興味をもっていただけたようでしたので、ホッとひと安心。

そして、登壇の機会をいただいたことで、APのエッセンスを自分なりに抜粋して、構成を考えながらお伝えするという経験ができ、わたし自身の大きな学びとなりました。

たくさん緊張し、冷や汗かきながらではありましたが、リーダーとしての成長のチャンスをいただき、ありがとうございました。たくさんアドバイスをくださり、一緒に創りあげて下さった野中代表、トレーナー・リーダー、参加者の皆さんに心から感謝です。

これからも、受講していただけるおひとりおひとりに寄り添うことを大切にしながら、APを伝えていきたいと思えます。

(リーダー 山下 香)

今日

今日、私はお皿を洗わなかった
ベットはぐちゃぐちゃ
浸けといたおむつはだんだんくさくなってきた
きのうこぼした食べかすが床の上からわたしをみてる
窓ガラスはよごれすぎてアートみたい
雨が降るまでこのままだと思う
人に見られたらなんていわれるか
ひどいねえとか、だらしなくてとか
今日一日、何をしていたの？とか
わたしは、この子が眠るまで、おっぱいをやっていた
わたしは、この子が泣きやむまで、ずっとだっこしていた
わたしは、この子とかくれんぼした
わたしは、この子のためにおもちゃを鳴らした、
それはきゅうっと鳴った
わたしはぶらんこをゆすり、歌をうたった
わたしは、この子に、していいこととわるいことを、教えた
ほんとにいったい一日何をしていたのかな
たいしたことはしなかったね、たぶん、それはほんと
でもこう考えれば、いいじゃない？
今日一日、わたしは澄んだ目をした、髪ふわふわなこの子のために
すごく大切なことをしていたんだって
そしてもし、そっちのほうがかほんとなら、
わたしはちゃーんとやったわけだ

ニュージーランドの
子育て支援施設に貼ってあった詩

訳：伊藤比呂美





子どもは 語らない
子どもは 表現する言葉を持たない
子どもは ただ感じている

子どもは 語ることを許されない
誰ひとり 耳を傾けようとはしない
子どもは感じていもの押し込めてしまう
深い無意識の中に一

子どもが 大人になると
不思議なことが起こる
私って どうしてこうなるの？
それは 自分でもわからない

無意識の中に押し込められた
子どもの感情が
内なる子どもとなって
いまも 無意識の中に 生きている

ある日 突然
内なる子どもが語り始める
悲しみをこめて
怒りをこめて子どものときに
感じたものが何だったのか
それがどんなに厳しい感情だったのか
大人は はじめて知る

そうだったんだ
つらかったね
そんな中で 生きてきたんだ
大人は 子どもの存在に
はじめて気づく

子どもは 何も語らない
だから 大人は 何も知らない
でも 大人の中にいる
内なる子どもは
雄弁に 語ってくれる
その言葉に耳を傾けよう
(手塚郁恵発行 Rejoice第37号より)



あとがき：

世界的な不安から始まった2021年。早いもので今年も終わろうとしています。みなさんにとって、今年はどうな1年でしたでしょうか。私にとって今年は出会いの年でした。受講生さんとの出会いはもちろんのこと、APジャパンの活動をしていく中で、全国にいらっしゃるたくさんのリーダーさん、トレーナーさんたちとの出会いがありました。パンデミックにより人と会うことが制限されてきた中、こうやってたくさんの素敵な出会いがあったことに心から感謝しています。来年も皆様にとってますます輝く一年になりますように。そして来年も変わらず、よろしく願いいたします。(畠中)



APP社のホームページ

<http://www.activeparenting.com>

APジャパンのホームページ

<http://www.activeparenting.or.jp>

「リンク」はAPジャパンの印刷物です。

© 2021 発行者 APジャパン
代表 野中 利子
副代表 畠中 愛子

〒814-0111

福岡市城南区茶山2-2-5 (本部)

電話：090-8391-3196

FAX：092-851-8606

apjapan@activeparenting.or.jp

季刊誌「リンク」は年4回発行しています。
ホームページで自由にご覧になれます。